

2023 年度 G T セミナー 第 57 回保育環境セミナー 子ども主体編④

第 3 4 5 号 2023 年 10 月 9 日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

子ども主体編④

2023 年 9 月 4 日～6 日に「第 57 回保育環境セミナー」
(子ども主体編)を開催しました。

オフライン参加は約 150 名、オンライン参加は 60 施設を超える
お申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「子ども主体」に
ついて考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4 回に分けてお送りする最終回です。

【セミナー開催趣旨】

「見守る保育 藤森メソッド®」の提唱者 藤森平司先生は自身の実
践から今の保育形態を構築しました。その実践のポイントは「子ど
も同士」「異年齢」「子ども主体」「チーム保育」の 4 つです。

「見守る保育」という言葉はいろいろなところで一人歩きしてしま
い、勘違いされることがあります。

そこで提唱者である藤森先生の名前を使用することで、しっかりと
した理念とエビデンス、そして 4 つの重要ポイントを実践すること
で差別化を図りました。

また実践園は根底が同じであるため、様々な実践が生まれます。
その実践を互いに学び合うことができるのも、メソッド化した
もう一つの理由です。

GT は乳幼児施設同士が繋がることを目的とした組織です。

今後より繋がりが深くなることを願っています。

ギビングツリー代表 藤森平司（新宿せいが子ども園 園長）

見守る保育 藤森メソッド
ギビングツリー代表 藤森平司

見守る保育 藤森メソッド
57th 子どもの主体
保育環境セミナー

今、子どもに必要な
保育の「考え方」と
「態度」を学ぶ。

子ども同士の関わり・異年齢
7/10(日) 11(金) 12(土)

子ども主体
9/4(日) 5(金) 6(土)

チーム保育
11/13(日) 14(金) 15(土)

子ども同士や異年齢での関わりは、
市から子ども園は多くのことを学べ
ます。そのための保育者としての後
進、考え方を学ぶセミナーです。

子ども主体の環境とは何か? 「考え
方」で考えることが大切です。それ
を実践するための考え方、そして具
体的な方法を学ぶセミナーです。

チームで保育することの重要性。そ
の考え方を学ぶことで、子どもたち
の可能性が広がります。

保育環境セミナーは各編3日間の日程です

1日目 園見学 + 2日目 講演・実践発表 + 3日目 園見学

オンライン参加も可能です。詳細はホームページをご覧ください。

第 57 回保育環境セミナー Q&A

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

今回、オフラインでセミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。

【質問⑥】

園長をしている者です。前回の異年齢保育の時に質問できなかったのですが、私の県の有名な心理学者、発達障害などをおもになさっている大学の教授が、自園が異年齢児保育の良さを皆で理解し実施している最中に、異年齢保育は不適切な保育だと職員の前で話され衝撃でした。

理由はその月齢の成長をキチンとせずにいるからだ、そうです。けしてごちゃごちゃに適当に保育をしている訳ではないのですが、先生のご意見をお聞かせ下さい。

まず一つはこの先生は考えている異年齢児保育は、たぶんは多く行っている異年齢児保育だと思います。異年齢児保育だと、月齢の成長をさせていないと書いてあるが、成長は月齢によってするわけではないですね。発達は、順序でしていきますので、その子によって違います。月齢だって、同じ月齢でも発達は違いますので概ね同じだけです。もう一つは月齢に沿って 12 ヶ月、12 人の先生がいて一人ずつを見るならいいが、実際の年齢別は 12 ヶ月の幅の子を一斉に見ているわけですよ。一斉に見ていたら成長がバラバラだったら、キチンと保証できないじゃないですか。私が言う異年齢は成長によって分ける考え方です。はさみを 4 歳だからではなくて、直線切りを出来る子を集めているやり方なので、一人ひとりの発達を保証しようという保育なので、逆ですよ。今までの年齢別の方が、成長を無視して、月齢で集めて同じことをさせていますけど、私の場合は、同じ発達同士で、成長度合いで集団をやろうという考え方ですから、今までの異年齢はそうじゃないですよ。成長じゃなくて 3.4.5 を縦に割って、そこに同じことをさせていたら、成長を無視していますよね。そういうイメージを持っているのではないかと思います。一人ひとりの成長に合わせて、集団を決めるやり方なので、きちんと発達を保証ということで年齢で分けないというのは、そういうことではないです。何も異年齢で触れさせる意味ではないですね。成長を合わせてする場合ですよ。成長を逆にすることで、真似をしたり教わったりすることも、違う発達だから起こることですよ。同じ発達だったら、しないですよ。そういう意味もある。特に発達障害の子たちは、その子なりの成長がある。例えば、歩けない発達障害の子がいたとして、うちの場合はまず発達が遅れた子が小学校をどうするかを親に聞いたら、普通学級は難しいと思いますということで、4 歳だった子が、2 歳と同じくらいの発達で、置いてある玩具も動き方もあうわけで、子どもが生き生きしていた。発達障害の有名な先生が来て、4 歳なら 4 歳相当の部屋で見るべきだと言ったが、何で？と思った。その方が発達を無視していますよね。親が普通学級に入れたいと言ったら、考えないといけないが、親はその子の発達にあった学校に行かせますということで、その子の発達に会ったクラスで保育したら、巡回の先生がそう言ったんですよ、びっくりしました。そっちの方が発達を無視していると思った。4 歳は 4 歳でやるべきことがあると言ったが、その子の今の発達としてやるのが先ですよ。担当の職員が、その先生が帰ったあとに「今までのやり方でいいですよ？」と聞かれたが、「その子が心地よく過ごすことが大事だから、いいよ」と言ったことがあって、その人の価値観や経験上、その先生が見てきた異年齢は、個人の発達を無視して、ごちゃ混ぜにした異年齢を見たからそう思ったんだと思います。今一番問題なのは、この先生はちゃんとしている先生だと思うが、巷に障害を見

る支援施設があります。多くあるのが幼児教育をしているところが行っているところがあり、チラシが来て、研修を受ければ開設できますよと案内が来るが、ちょっとただけで指導していると思うと、本当にそれでいいと思う。親は信じますからね。ちゃんとした先生と言ったら変だが、園内研修で発達障害の専門家を呼んで研修をしよう、今年の初めにお呼びして勉強しました。その先生が指導したからと言って、必ずしも正しいか分からないので、対応で将来が台無しになってしまうこともありますので、慎重にしていけないといけないと思います。もう一つは、専門は専門でやった方がいいと思います。ただし、そういう場所は健常者を見ることもないし、集団を見ることもないので、それが出来るのが私たちの役割です。実際に発達障害の子が、そういうのを見ることで、障害が改善してきた例をいくつも知っていますので、他の子と分けないで、入れるべきという思いがあります。他の子もそういう子がいる存在というのが、普通になることは大切です。どちらにとっても隔離するのではなくて、一緒に保育をするべきだと思っています。それはお互いを知ること、他の子は他の違いがあることを知っていくことを、小さいうちから必要だと思っています。発達障害の子も一緒にすることは大事です。ただし、週1回、2回専門へ行っ、それに対することをしてもらいたいと思います。その先生に我々がやろうとしている異年齢保育を、理解してもらった方がいいかもしれないですね。その先生の視野を広げるためにも、説明したほうがいいかもしれないですね。

【質問⑦】

現在 3、4、5 歳児異年齢クラスを担当しています。クラスの割合的に 3 歳児の割合が多く、またそのクラスで気になる子の割合が多いです。年上の子が作っている遊びを壊して歩いたり、廊下やベランダに飛び出していたり、唾をかけたり関わりや行動面で目が離せず他の子もその子たちに対して嫌な気持ちを抱いている状態です。

その子たちや周りの子の遊びを守りつつ、生活や遊びが充実できるようにしたいのですがどうすればいいのでしょうか？

この子がどうか分かりませんが、コロナの後にそういう子たちが急増しています。いわゆる社会性が出来ていない子たちが多いです。これは小学校・中学校も今問題になっています。コロナがあけた弊害として、自分だけの行動をしてしまうことが多い。みんなに共感しながらやらない子たちが少しずつ、弊害として言われ始めています。私の園でも何人か目立つ子がいます。ただうちの園を見て頂くと分かると思うが、それほど目立たない、それは他の子があまり気にしていないんですね。今は多動の子が多いが、去年はパニックになる子がいたが、その子自身が自分で落ち着いていくことをするから、ほっておいてよという感じで、その子がそうになったら廻りがサーっと引いて、その子に関わりなく知らん顔してくれる。その子が立ち直ると、戻って遊んでくれて、子どもたちがそうすることと、その子も自分で分かっているの、自分でおさめますね、最初ベランダに出て気持ちを落ち着かせていたが、ウサギを飼っていて、一回指をかまれ怖がって出なくなった。教材庫に行ったら落ち着いていたが、そこにあった紙などを破いてしまったりして、それはまずいということで、うちの孫が使っていたテントを持ってきておいて置いたら、ある時そのお母さんとすれ違ったときにお礼を言われた。静かに過ごせる場所を作ってくれたと喜んでくれた。その子は、わかっていないかと思ったら分かっているんだと思った、そういうことを自分で始める。大きな音だとだめなので、ヘッドホンを持ってつけられるようになった。そうやってできるようになったので、学校からも見に来て大丈夫だねと普通学級に入れたが、最初ダメだった。自分で冷ますことを学校が最初許さないで、余計ひどくなった。夏前にやっとお母さんから手紙が来て落ち着き始めました、うちの子が落ち着く場所に行かせてくれるようになった。教室の隣が図書室らしく、そこへ行くと落ち着いて、学校の先生が認めて他の子も理解してくれるようになり、落ち着いてきましたと手紙をもらった。他の子も認め合っていくことなんですけど、昨日見学された方は、見た中で跳び

箱をやっているときに邪魔する子がいたが、追いかけるのが大変。好きなところへ行って、すばしっこさがすごい。積み木はなぜか壊さない。興味があって触るが壊すことはしない。それは何かというとロボットで、人の言うことを聞かせるということで命令をする。いろいろな命令をし机を歩きなさいというと、歩き出す。そこから落ちそうになると止まるんですね。そのロボットに積み木を壊しなさいという、いやです。人の命令が聞けないのかというと、ロボットは何で壊さないのか、一生懸命作っているものを壊せませんと言って、しゃがみこんで泣いてしまうロボットがある。ロボットはそこまで進化しているんです。出来上がったブロックを見ると、壊す楽しさがあります。でも作っているプロセスを見せると、障害の子でも一生懸命やっている姿を見ると壊さないですね。一緒に作るとか、過程を見せると壊さないですね。机の者をひっくり返すなどはあるが、真剣に作った子が、ムキになって怒るんですね。障害の子でも、大人から言われることはあまり気にならないが、他の子だと気になるみたいですね。壊された時に子どもにどうしますか？と質問したら、ほとんどの子が答えたのが、わざとだったら怒るけど、間違っ壊しちゃったら今度から気を付けてねというようにすると言っていた、理想ですね。何でそういうことを言えるかと言ったら、自分が3歳の時に触って壊しちゃったときに、今度から気を付けてと言われ嬉しかったら、下にもやると言っていた。先生に対しても、誰かに対しても、嬉しい体験を誰かにするんですね。壊したからと言って、ムキになって先生が怒っていたら、子どもはそうなってしまいますよね。間違っ壊しちゃったら、今度から気を付けてねというだけです。意外とこういうことがいることで、子どもたちが勉強になる。一度こういうことありました。一生懸命積んだブロックがあって、間違っ通って壊してしまった。あっ！？と言ったら、うちのベテランの先生が新人の先生に、これからいいことが起きるよ、よく見ててごらんと。そういう時に子どもがどう対応するか。壊した方も壊された方も、これがある意味保育ですよ。もちろん喧嘩が怒るかもしれませんが、何もなくて、壊された経験もなかったら、人生で自分が壊れてしまいますよ。子どもはまた作るからと言ったりしますからね。これが変に囲ってしまって、小学校の校庭がせっかく異学年に遊ぶのに、遊ぶ場所が学年で決まっているんですよ。親の苦情で6年生の投げたボールが1年生に当たったら、危ないじゃないかと言われ、学校では1年生と6年生が遊ぶ場所を分けている学校があるんですね、6年生のボールが危ないと言ったら、人生でどれだけ強いボールが飛んでくるかわかりませんからね。ボールでめげていたら生きていけないと思ってしまうが、壊されたら壊されたでどうするか。一回感心したことがあった。年長さんが壊されてしまって、作っていた子たちが上の階の制作ゾーンに怒っていったと思ったら、そうじゃなくて、設計図を書いて図面を書いて下にもう一回作ろうとしていた。壊された事件があるたびに、子どもたちは成長していく可能性がある。いい方にもっていくこと、ただしいけないことは止めないといけません。暴力をふるうとかは、もし障害のお子さんだったら命令はしない。ここへ行って、こうしてと3つなんてだめですね。伝えるのには五感の複数から伝える。ダメは耳からくるから、目にも言えるようダメと仕草ですとか、それはトレーニングをしていかないといけないことは伝えないといけないです。それは人に危害を加えること。常に怒っていたら、何がいけないかわからないですからね。いけないときだけ雷を落とすこと。01でたまに先生が怒鳴っているのが聞こえる時があるが、子どもと大人のやり取りですね。だからと言って小言は言わない。障害の子も何が聞けないのか、何を怒ることかわからないといけません。危害だけは社会で生きていくためのルールですからね。走ろうが、寝っ転がろうがいいですし、壊されたら作っていた子が怒るべきですね。そうする方が、効果があると思います。いろいろな出来事が起きるのが園ですから、毎日が平和で幸せにではないです。世の中出たら、色々なことがありますからね。先生たちみんな、子どもたちに体験させていくことが大事だと思います。ただし言葉による暴力も含め、危害は絶対にしてはいけません。しかし、ちょっと言葉がきつてもいいとは思いますが、子どものことを

大事に想っているのなら。そうじゃないと穏やかだけだと、小学校へ行ったらめげてしまいますからね、ちょっときつい先生がいたら、学校へ行っても大丈夫かもしれないと思うようにしています。

【質問⑧】

子どもの興味関心を育てるというところで、子どもたちの遊びへの意欲が少ない姿があります。遊びを提案してものってこない、どんなことをしたいか聞いても答えられない(またはゲームやスマホと話すなど)

こちら子どもたちの姿から遊びのコーナーを考え配置するなど試行錯誤する毎日です。

遊び込めない子どもとしては安心基地が確立していないと思われる子やコロナの情勢もあり、遊び自体の経験が少ないことなどが考えられますが、子ども自身が遊びを充実させていく環境や活動にはどのような要素やかかわり方が必要だと思いますか。

まず一つはベルギーですが、子どもが集中して遊びにいけないときは、まずその場所がいいのかを見直します。その次に、ここに置いてあるものが子どもに魅力のあるものかどうか。全然本を読まない場合、私は図書係りに子どもがどんな本に行っているのか人気あるのか本屋に見てきなさい、それがないと当然無理なので、まず環境としての場所がいいのか、子どもにとって魅力があるかを見直します。その次に先生がやることは、先生が面白そうに遊ぶことです。それを見せる。先生が先だって遊ぶ面白さをやってみる、その中で教えないといけないのは、素晴らしいことを見せるのではなくて、失敗する姿や失敗してもくじけない。飛行機を飛ばしてもなかなか飛ばない、何回もやっている姿を見せること。先生が見せるモデルは素晴らしいことを見せるモデルではなくて、失敗してもくじけない姿や、好奇心、何度でも挑戦する姿を見せることがモデルです。なぜかという、その要素が将来成功したり、いろいろなことを発明する元の力になるからです。先生たちが褒める時も、結果をほめてはいけません。よく頑張ったねと途中をほめる。プロセスをほめるといいと言われています。子どもが興味がなかった場合には、場所を見ることや、発達を見ること、先生が楽しんでやると、子どもは興味ながらに見ています。自分でもやろうとしますので、やらせるのではなくて、先生が先にやる。職員にも心掛けてのことだが、こういうことを見ました。大学の先生が日本と外国の違いで、学生がいいことを思いついた。先生に、こんなことを思いついたのでやってもいいでしょうか？と、言うと、日本の場合はやってごらんというそうです。外国の先生はそう言わないそうです。私も、そういわれたことがあるが、何か面白いことを見つけると、園長にどうでしょうか？と聞いたら、やってごらんと言ってくれないんですと言われ、「私、言わないのかな？」と思ったら、「それ面白そうだから、一緒にやろう」と言いますと言われた。こういうもの買いに行きたいんですと言われたら、一緒に買いに行こうと言ってしまふんですね。大学の先生がそれを比較で読んだことがある。外国は一緒にやろうという。おもちゃも面白そうだったらやってごらんではなくて、やってみようと、やってしまうことが大事だと思います。それか時間がなければ、それを面白そうにやっている子呼んでやって見せてあげてよと、子どもに頼む。発表にもあった食べれない子が食べれる子を置くのと一緒です。そのゾーンのチャンピオンを決めて、そのゾーンの先生と決めているところがあった。折り紙ではこの先生とか、その子自身は余計に覚えようとするので、子ども同士にやったり、好きな子から影響させていくことも大事です。それがなければ先生がやる、それは挑戦する姿を見せるということです。

【質問⑨】

年長児、トラブルが続く子同士の話し合いがいつも同じパターンになってしまう。「○○が嫌だった、嫌な気持ちになった。もうしないで」「わかった。ごめんね」これの繰り返しです。どのように見守ってあげればいいのでしょうか？

解決方法は同じパターンでも、本人が納得し合えばいいと思います。大人の理想の解決方法はしなくてもいいと思います。年齢によって違います。私からすると01の解決法が素晴らしいと思います。何かというと執着しない。さっさと諦めて他のことをする。これは小さい子の特別な考え方ですね。子どもによってあるので、ごめんねというだけ素直だなと思います。なかなか言わないので、別に子ども同士がいいなら私はいいと思いますね。もしそうでなかったら、仲裁に他の子にさせる。あの子たちを見てあげてよと言って、小さい子の場合は大きい子はすごいやってみて面白いのは丁寧に解決方法を教えますね。まず行ってご覧とか、自分と思ったか言ってご覧と解決方法を上の子は下の子に指導するんですね。ちょっと違う場合は、他の子に頼んでみるということもありかもしれないですね。先生対子どもの関係にするのではなくてですね。これは力関係で弱い子が謝ってしまうこともあるが力の弱い子の生きる知恵ですね。さっさと謝れば終わると思っているんでしょうね、これも一つの智慧かもしれないので本人たちが納得し合っていればそれでいいと思いますね。自分を主張し始めた時に他の子に仲裁を頼むといいと思います。

【質問⑩】

子どもが主体的に活動に移れるようにできる言葉の掛け方は、どのようにしたらいいのか教えていただきたいです。

質のいい保育というのがイギリスの研究でありました。それは何かというと応答的という言い方をしています。こちらから先に言わない。子どもから言われた時にそれに応えるやり方をするのが主体的です。こちらから先回ってやらないことが質の高い関わり。もう一つが質問すると書いてあった。最初意味が分からなかったが、実習生で分かったが子どもたちと実習生が遊んでいました。給食の時間になって、実習生が気づいて給食の時間になって早くいきなさいと言った。その時にうちの職員が同じ場面で、こういう言い方をするのかと思った。一緒に遊んでいてふと気づいて先生がもうこんな時間。給食の時間になっちゃった、どうする？と聞いた。これは質問ですね。なぜか子どもがそれに対してすぐ行くよとか、区切りが付いたら行くとか子どもが決定をするための質問です。分からないことへの質問ではなく、決定を支持するのではなく、気づかなかったら教えないといけないですが、だけどそのあとにどうする？と質問をして決定を子どもがする。何かの時に子どもにどうすると聞くこと。子どもがこうすると子どもに決定させることが、子ども主体の言葉掛けのヒントになるかもしれないです。そういうことを言うてみてください。子どもにどうする？何か決定するときはどうする？こどもに考えさせ、決定させることがイギリスの研究の中でいい関わり方として出ています。日々いろいろな場面でどうしたらいいかと悩むと思います。それは子どもも悩んでいると思います。それを環境を通して、子どもが自分の意志が通る環境を作ることも、主体的な活動をするための環境構成だと思います。質問の一つずつには答えられませんでした。よりよい保育をしてもらえたらと思いますし、どこかの機会に答えが見つかることがあると思います。これってこうすればいいんだと分かると思いますので、考えてみてください。実践発表や私の話を聞き、質問を自分で少し解決できるようになったら幸いです。それが保育者主体の保育かもしれないですね。また是非園に帰って、保育を楽しんでももらえたらと思います。またどこかで会えるのを楽しみにしています。

本稿は、2023年9月5日に開催した「第57回保育環境セミナー」のQ&Aの内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)